

2026年度 仙台青葉学院短期大学 こども学科
学校推薦型選抜（公募推薦）入学試験問題

小論文

受験番号	氏名
------	----

次の文章を読んで、問に答えよ。

（前略）アメリカでは、日本のように学校行事を学年別に行ったりしない。公立小中学校には、一般的には、日本のような入学式も卒業式もない。運動会や修学旅行といった学校行事も、教育課程に位置づけられていない。例えば、PTAがレクリエーションのためにスポーツ・フェスティバルを開催したとしても、それは教育課程に含まれていないので、参加はもちろん任意である。

さらにいえば、中学校以上になると、生活集団としての学級自体が存在しない。朝登校したら、生徒がまず向かうのは、廊下に並べられたロッカーである。教室には自分に割り当てられた座席はないため、教科書やその他の荷物を、割り当てられたロッカーに入れたり、そこから取り出すのである。日本でいう「学級活動（学活）」の授業を一緒に受ける集団はあるが、週に一度くらいの頻度で「学活」の時間に会うだけの集団である。時間割は基本的に個別であり、中学生も高校生も、大学生のように自分の授業時間割に沿って、授業ごとに指定された教室を渡り歩く毎日を過ごす。

個別時間割とか参加自由と聞くと、魅力的に感じられるかもしれない。私自身も、かつては日本の学校の集団が息苦しくてたまらず、アメリカの大学院に留学したばかりの頃は、とてつもない解放感を覚えて、生き返った感覚に浸ったものだった。しかし、(1)隣の芝生は青く見えるとはよく言ったもので、どこへ行っても現実はそう甘くない。アメリカの場合は、大学だけでなく、高校も中学校も、徹底的に自己責任で学習を組み立てなければならないという、実に厳しい世界であることも痛感するようになった。

（中略）

日本の公立小中学校の一般的な風景をみてみよう。まず入学式が行われ、〇年△組という集団が編制され、学級ごとに教室が決められる。教室には、生徒の席が用意される。学級ごとに共通の時間割が組まれ、授業も学級単位で行われる。生徒は授業以外でも、一日の大半の時間を自分の学級で生活する。さらに、運動会や修学旅行などの学校行事も、学級・学年を単位として行われる。入学から卒業まで、同一学年で編制された学級が、すべてにおいて基本集団となるのである。

（中略）

長所として挙げられるのは、学級が単に勉強するだけの場ではなく、子どもがまるごと育つ場になる点である。教員の側からみれば、学級は授業時間外にも子どもと関わりながら、全人的で包括的な教育活動を行える方法となる。

（中略）

子どもの側からみれば、学級には、必ず自分の座席が用意されていることに大きな特徴がある。自分から声をかけて友だちをつくるのが苦手な子どもでも、まずは自分の居場所が確保されていることになる。

一方、以上の長所は、そのまま短所となりうる。学級が、子どもの学習だけでなく、全人的な子どもの成長を支えようとする場であることは、教員にとっては仕事の量が増えやすくなり、その困難さも大きくなることを意味している。

(中略)

また子どもの側からすれば、同じメンバーでずっと生活を共にしなければならぬので、人間関係にひとたびトラブルが生じれば、学習だけでなく生活にも支障をきたす悪夢の場所になる。

(中略)

つまり、日本の学級集団は、日本社会の歴史や文化、コミュニティのあり方を反映している。稲作を中心とする農村地域では、田植えや水の管理など、地域ごとの共同作業が不可欠で、隣人がどんなに嫌いでも、なんとか折り合いをつけながら地域社会で生きていかなければならなかった。都市生活においても、欧米のようなむき出しの自己主張よりも、社会性や協調性が重視されている。このような日本社会で生きるための社会性や協調性を育てることが、よくも悪くも、いままでの学校に期待され、学級が重視されてきたのである。

出典:佐久間亜紀『教員不足—誰が子どもを支えるのか』、岩波書店、2024年、40-45頁、一部改変

問1. 下線部(1)「隣の芝生は青く見える」とはどのような意味か。文章に即して400字以内で説明せよ。

問2. 日本の学級のあり方について、教員として、又は児童・生徒として、どちらか視点を定めて、あなたの考えを400字以内で述べよ。